

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

はるか2000年の時を超え、人を魅了し続けるチョコレート
の秘密

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4369

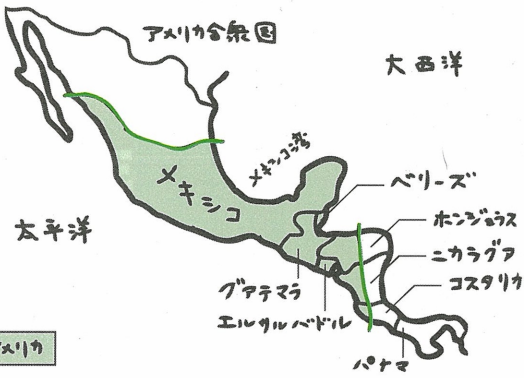
はるか2000年の時を越え、人を魅了し続けるチョコレートの秘密

八杉佳穂さんに聞く

スイーツには欠かすことができない、甘くて、おいしいチョコレート。この一粒のチョコレートは、どのようにして人類と出会い、現在の「嗜好品の王者」の座を獲得したのか。私たちが魅了するチョコレートの秘密。



メソアメリカの cacao 豆の産地



メソアメリカ

ヨーロッパ人を仰天させた、見るも奇怪な飲み物

見かけは、茶褐色でドロドロ。カカオをすりつぶしたペーストにトウガラシやトウモロコシなどを混ぜた濃厚な飲料。舌ざわりはザラザラで、甘いどころか、どちらかといえば、まずい。この飲み物に初めて遭遇したヨーロッパ人は、「まずくて飲めず、豚の飲み物のようだ」と形容した。

そう、その飲み物こそが、チョコレート。今でこそ、チョコレートの固形の食べ物だが、最初は見るも奇怪なスパイスードリンクだった。八杉佳穂さん（国立民族学博物館教授）によると、チョコ

レートはメソアメリカ（現在のメキシコ及び中米）の地で、古くから飲料として飲まれていたのだという。王侯など、高貴な人しか飲めない大変に貴重なものだったようだ。

「マヤの遺跡から出土した壺の中にカカオの残渣が残っていたので、少なくとも5世紀頃にはすでにドリンクとして飲まれていたと思います。お墓の副葬品だから、それがいかに貴重なものだったか伺える。15〜16世紀の大航海時代にはコロンブスが新大陸を「発見」しますが、ヨーロッパ人はこのチョコレートの存在にそれほど驚いたようで、中米について記した文献には必ず

と書いていいほど、チョコレートとその原料であるカカオの記述が登場します」

たとえば、コロンブスは交易品を運ぶマヤ人のカナヌに遭遇して、「お金として使われているカカオ」を発見し、アステカ帝国を征服したコルテスは飲み物としてのカカオにふれながら、「あまねく貨幣の役目を果たし、必要なものはすべてこれで買える」と記した。また、他の文献にも、「王以外の庶民が口にすると処刑される」「この飲み物は女と交わる時に飲む」などと記録されており、貴重な飲み物であるばかりか、栄誉の高い精力剤として飲まれ、またお金としても使われていた。

やさぎ・よしほ
1950年、広島県生まれ。75年、京都大学文学部卒業。マヤ言語学、文字学、中米文化史専攻。現在、国立民族学博物館教授、総合研究大学院大学併任教授。文学博士。著書に「マヤ文字を解く」（中公新書）、「マヤ興亡」（福武書店）、編著に「チョコレートの博物誌」（小学館）、「マヤ学を学ぶ人のために」（世界思想社）など。



Photo: BI

「ヨーロッパ人が新大陸で発見した植物は、トウモロコシやジャガイモ、トマトなど数多いのですが、なかでもカカオは幹に直接花と実がつく特異ななり方をするので、初めて見た彼らは異様に感じたでしょう。それがお金として使われ、しかもそのお金を飲んでいるわけですから、それはもう衝撃だったと思いますね」

人間社会を機能させた「神の食物」

メソアメリカの人びとにとって、カカオは貴重かつ特別な植物だった。カカオ豆10個でウサギが手に入り、100個あれば



カカオは幹に直接、花と実がつく

奴隷が買えた。まさに金のなる木だが、仮にカカオが大豊作になれば、貨幣としての価値が低下するため、その際には所有者がカカオを飲食用に振り向け、今でいうインフレとデフレの経済調整までしていたと推測できるといふから、恐れ入る。

「カカオの木は、高温多湿の熱帯低地帯で、しかも太陽の光や風を避けた日陰の場所でしか育たないので、当然、数に限りがあり、だからこそコントロールもしやすく、貴重なものになりえた。それに、カカオの実は耐用性があり、持ち運びも容易ですから、お金になれるいくつもの条件をそろえていた」と八杉さんは言う。

飲食とお金という人間社会で欠

かすことのできない重要な機能を果たす一方、カカオはテオプロマ（ギリシャ語で神の食物）という学名の通り、神の食物としての側面も持ち合わせていた。

「スペイン人が新大陸にやって来た時、インディオたちはトウガラシとアチョテといわれる明太子などに入っている食紅を混ぜてチョコラテを飲んでいたので、おそらくそれは血の赤色に近づけるためでした。というのも、カカオの実は、人間の心臓の形に似ているんです。はるか遠い昔、彼らの祖先は、神への捧げものとして、自分たちにとって一番大事なものを、つまり心臓を捧げ、その血を自分たちも飲んでいました。それが、いつの頃からか、血の代

わりに栄養価の高いチョコラテを飲むようになり、その記憶が彼らの中に残っていたのではないかと思います」

さらに、カカオは薬としての役割も果たした。利尿作用と筋肉弛緩作用があるテオプロミンを多く含み、さまざまな薬草と混ぜることで、口や喉の炎症、菌痛、下痢、血便、肝臓や肺の炎症など、実に広い範囲の治療に用いられていたという。そうした万能ともいえる効能が、またカカオの神格性を高めたのかもしれない。

考古学的には、すでに5世紀頃の土器にカカオの文字が確認されており、少なくとも紀元前10世紀頃には生活の中で何らかのかたちで用いられていた、と考えられている。そうした事実を踏まえ、八杉さんはチョコレートと人類の最初の出合いを、こんなふうに推測してみせる。

「カカオの豆はブドウのようなキユーティクルに覆われていて、それを食べると、甘酸っぱくておいしいのですが、おそらく最初はその外皮を食べていたのでしょう。それが、ある頃から、食べ残したりした後に発酵する実の方がおいしいということに気づいた。現代流に言えば、ポリフェノールの作用なのですが、それを食べると、なぜか元気になったり、穏やかな気持ちになった。また、カカオの約半分は脂肪分ですから、家

畜がいなかった時代、貴重な栄養を補給することができたし、脂肪が多いから患部に塗れば、血も止まったのでしょう。そうやって、古代メソアメリカの人びとは何世紀にもわたって、カカオのさまざまな効用を発見してきたのだと思います」

コーヒーに敗北したチョコレート その華麗なる変身

果たして、奇怪な飲み物だったチョコレートは、征服者によって持ち帰られたヨーロッパで砂糖と出会い、チョコレートハウスができたことで、特に女性が好む嗜好品となった。だが、その飲み物が、現在の私たちの知る「食べるチョコレート」になるまでには、まだ300年近い時を経なければならぬ。チョコレートが華麗なる変身を遂げたのは、19世紀のことだ。

「チョコラテは、同じ頃から嗜好品になったコーヒーやお茶（後に紅茶となる）にしだいに追いやられていき、特にコーヒーには勝てませんでした。脂肪分が多すぎて、しつこく、1日に何杯も飲める代物ではなかったからです。そこでヴァン・ホーテンが、この脂肪分を分離して初めてココアを作りますが、それは2000年以上の長いチョコレート史の中でも、中世と近

代を分ける最大のエポックでした。この発明がなければ、私たちは今のチョコレートを食べていないかもしれません」

古代のメソアメリカでは「神の食べ物」として崇められ、征服時にはヨーロッパ人を仰天させ、そして多くの女性をも虜にしてきたチョコレート。現代に至るまで、チョコレートが人間のさまざまな欲求を満たしてきた秘密は、何だったのだろうか。

八杉さんは、こう話す。「最近では、ポリフェノールがガン予防に効いて健康にいいというものもありますが、やっぱりチョコを食べると元気になるというのが一番の理由じゃないでしょうか。登山の時なんか、よく『板チョコ1枚持って行け』と言われるのも、チョコがあれば何日も身体がもつからですし、食べると、いい気持ちになって心も静まる。日本で愛の告白の日であるバレンタインデーにチョコレートを贈ったりするのも、ひよっとしたら古代の人がカカオを催淫剤として使っていたことと関係があるのかもしれない」（神田和博）



『チョコレートの文化誌』
八杉佳穂／世界思想社
1995年